



アーティスト

館鼻則孝さん

レディー・ガガの靴を創る 日本人デザイナー

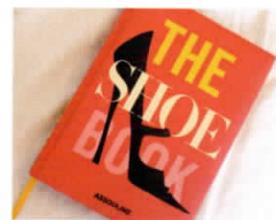
writing kaori_NAKANO photograph yuji_HAMADA



オーダーメイドシューズの型。
レディー・ガガに紹介された靴の人気は、
世界中のセレブリティに飛び火し、
海外の顧客からの注文が多いという。



ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館に
永久収蔵されている「ぼっくり下駄」。
花彫衣装にインスパイアされたもので、
モチーフは翼を広げるカラス。



ナンシー・マクドネル著
「THE SHOE BOOK」。
マノロ・ブランイクや
クリスチャン・ルブタンと共に
館鼻氏のヒールレスシューズが
紹介されている。

モ

ードにとって重要なことは、生きのよさ。新しさ。では、
新しさって、何だろう？

それを考えるときに思い出すのが、ローズ・ベルタンの言葉である。ベルタンは18世紀、ロココ全盛時代のフランスで、マリー・アントワネットとともにありとあらゆる「新しい」ファッションを考案した「モード大臣」である。彼女は断言する。「この世に新しいものなんて何もない。ただ、忘れられているだけよ」。

今から200年以上も前に、すでにファッションのプロが「新しいものなんて何もない」と考えていたのだ。ましてや現在。ランウェイでは、たとえば過去のテーマをミックスしたりシャッフルしたりすることで、かろうじて「新しさ」を出そうとする試みがいまだ根強い。

そんな閉塞ぎみの状況のなか、デザイナー館鼻則孝は、ニユースなフレイズとともに世に出てきた。「レディー・ガガの靴を創る日本人デザイナー」。

かかとのない高い靴という奇抜なデザインもさることながら、突出したカルチャーアイコンであるレディー・ガガと日本人の靴デザイナー、という意外な組み合わせに世間は新鮮な驚きを感じ、「館鼻則孝」はニユースになった。弱冠29歳の好男子は、成功の秘訣をこのように語る。

「ヒールレス・シューズのデザイナーとして有名になったけど、同じような靴を創っている人はほかにもいます。靴が新しくなったわけではない。見せ方を新しくしたんです。そこは狙いました」。

館鼻の靴は美術館にも収蔵されているが、靴そのものの良し悪しはあまり関係がない、と彼は言う。「時代との関わり」、つまり、時代の先頭を走るカルチャーアイコンとのコラボという新しい登場のしかたでニユースになることによって、時代を象徴する靴としての評価を得たのだ、と。

とはいえ、靴そのものの衝撃も無視できない。かかとのない高い靴。この発想はいったいどこから？

「ぼくは最初から世界を目指してきました。日本ではヨーロッパ風のもので売れますが、ヨーロッパに行けば日本のものこそが強みになる。だから徹底的に日本を研究しています。この靴も、日本の



館鼻則孝 / Noritaka Tatehana

1985年東京生まれ。15歳より洋服や靴の制作を独学で始める。東京藝術大学美術学部工芸科へ入学し、絵画や彫刻を学び後年は染織を専攻。在学中は、花魁に関する文化研究と友禪染を用いた着物や下駄の制作をする。卒業とともに、自身のファッションブランド「NORITAKA TATEHANA」を設立し、同時にレディー・ガガの専属シューメーカーになる。

2014年10月5日まで、東京ミッドタウン・ガーデン内21_21 DESIGN SIGHT企画展「イメージメーカー展」が開催。国内外で活躍するクリエイターのひとりとして紹介される。いよいよ世界に向けて始動する館鼻氏から目が離せない

伝統的な履物を現代的に解釈したものですよ」

ゲタである。日本のゲタ+西洋のハイヒール+ヒールレス・シューズ。履いて、納得。これは高下駄を履いた感覚。不思議と安定感もある。

ガガの目に留まるきっかけは、自分で作った。卒業して2週間後、作品の写真をひたすら海外の雑誌社やスタイリストに送り続けた。

100通のメールを送り、3人から返事がきた。そのうちの一人がニコラ・フォルミケッティ。レディー・ガガのスタイリストである。「成功するまでやり続けることが、大事なんです」。

182センチの長身にコム・デ・ギャルソンがよく似合うが、ギャルソン好きは高校生のときから。毎週、お店に通い、自分の作品をスタッフに見せていた。面白がってくれるスタッフが一人いて、ほかならぬその人の口添えにより、館鼻は3年前からコム・デ・ギャルソンとの仕事もおこなっている。つまり、「ご縁」はすべて自分の努力で作りに出しているのだ。「あらゆる偶然は、必然だと思え」という言葉に経験の裏打ちがある。

今は靴だけではなく、かんざしを創ったり、彫刻を創ったりもしている。基本にあるのは、あくまで日本の文化である。日本の「ヘリテージ（文化遺産）」を研究し、そこに現代的な解釈を加えて、国際市場で通用するフレッシュな作品として提案している。

視野広く、目標高く、戦略的に行動するデザイナーではあるけれど、一点一点の作品を作る彼のモチベーションは、極めてパーソナルで優しい。「一歩、前へ出たい人を応援したいんです」。ファッションは個人へのコミュニケーション。人間をより能動的にしてあげる。自分を表現したい人の後押しをしてあげる。そんなファッションを提供したい、と語る。

モードとポップカルチャーが融合した世界で新しい価値を提示した館鼻のもとには、世界中からインタビュアーやアーティストが訪れる。「世界に出ていく必要はない。自分が渦の中心になり、世界を引き寄せればいいんです」。



中野香織さん

エッセイスト、明治大学特任教授。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。最新刊は監訳「シャネル、革命の秘密」。著書「モードとエロスと資本」、「ダンディズムの系譜男が憧れた男たち」ほか多数。

ポートレート Junya Inagaki